

週日の説教

金 大烈 神父 2010年7月8日(木)

《神さまのみ旨を受け入れる》

今日の福音(マタイ 10・7 15)を読んで、皆様はどのような思いがしたのでしょうか。

私は二つのことを考えてみました。

一つは、“この福音を書いたマタイが、一文字も変わらずにイエス様がおっしゃったことを全部そのまま書いたとは思えない”ということです。ただ、弟子達を派遣する時に、本当に厳しく言われたのだと思います。自分たちの使命を忘れないために、「見た目も、心持も、態度も、きちんとしなさい」という教えと共に派遣されたのだと思います。たとえば、「二枚の下着も持たないように」とおっしゃっていますね。洗濯する時はどうしますか？ このように極端な言い方でマタイは伝えていますが、そのくらい「心をこめて、使命感を持たなければならない。」とおっしゃっているのだと思います。そういう意味では、私たちも自分自身の生き方を反省しなければならないでしょう。

また、教会がいろいろな面で『清貧』という言葉を使うのには訳があることも理解しなければならないと思います。『清貧』の真の意味は、『分かち合うこと』です。「貧しくなって物乞いになってほしい」ということではありません。神様は、「みんなが豊かに生きられればそれが一番ふさわしい」と教えていらっしゃるのです。ただ、「分かち合うことが出来ないために、いつも足りなくて苦労している人がある」ということにイエス様が心を痛めていらっしゃるのです。そういう面では、私たちはみんな神さまから使命をいただいています。そのような気持ちで、周りの困っている人々に目を注ぐのは当然なことではないでしょうか。

さあ二つ目です。「どこかの町や村に行った時、ふさわしいと思われる人がいれば、その家に入って、旅立つまでそこにとどまりなさい。」そして、「その家の人からそれを受け取るのにふさわしければ、あなたが願う平和はその家にとどまる。しかし、もしふさわしくなければ、その家を出て、足についた埃を払い落しなさい。そうすればあなたが願った平和は、あなたに戻ってくる。」という話でしたね。

現実的に想像してみましょう。イエス様に厳しく言われた弟子たちが、本当にその言葉通りにしていたら、誰が見ても物乞いのような姿でどこかの家へ入ったのでしょうか。そのような、全然見知らぬ物乞いのような人に「私を泊まらせてください。」と言われ時、「どうぞいらっしゃいませ。ゆっくりご自分の家のように休んでください。」と言える人が、今の時代でも、クリスチャンでも、何人くらいいるのでしょうか。これは本当に難しいことですよね。しかし、聖書によりますと、受け入れてくれた人があるのです。これは素晴らしいことだと思います。よく考えてみてください。簡単にできることだと思いますか。いいえ、そうではないでしょう。そのような素晴らしいことのできる人だからこそ、主がおっしゃった「主の平和」が当然その家庭にとどまるはずで。

簡単なことなのに受け入れられないのが、今の時代を生きている私たち全体の姿かもしれません。

イエス様が、何かよいことのためにその人を派遣しよう、何かよいことをその家に起こそうと計画されても、私たちが拒むことによって、その祝福が、その平和が、遠くなってしまう場合が結構あるのでしょうか。家庭の中にいろいろな悲しいことがあるのだと思います。その時、その悲しみをどのように受け取るかによって、それが平和につながるのか、地獄になるのかが分けられるのではないのでしょうか。

家庭の中で、何かふさわしくないとと思われることが起こったとしましょう。その時、「なぜこんなことが私の家庭の中に起こるのか。」と本当にイエス様を責めるような気持ちで、不満ばかり持ってしまうと、その家は結局幸せとは逆の方向に行ってしまう。しかし、「祈りをきちんとして、信仰の生活をしよう、優しい心をできるだけ持とう、としている私たちの家庭になぜこんな試練が与えられたのか。でも、これにはみ旨があるのだろう。祈りと共にこれを上手に乗り越えられれば、そのみ旨の意味が分るのだろう。図れるのだろう。」という姿勢が私たちに許されれば、必ず信仰的な家族、家庭が保たれるのだと思います。

皆様、私たちは避けられない状況によく陥ります。その時、どのような姿勢を見せるのか、どのような態度を持つのかによって、天国にも行けるし地獄にも行けることを意識しましょう。いつか皆様に申し上げたように、不幸な人とは、“自分が不幸だ”とってしまう人です。どんな状況でも「私は幸せです」と言える人は、たぶん常しえに幸せな人なのでしょう。

私たちにはいろいろな機会が与えられていますが、ただ通り過ぎてしまう場合がたくさんあるのではないのでしょうか。それを振り返りながら、これからは、どのようなことにも注意深くみ旨を探そうとする態度を持てるように頑張りましょう。

ありがとうございました。